

# 名前とアイデンティティ

## —日本にルーツを持つ学生へのインタビュー—

上田 潤子

### 要旨

早稲田大学日本語教育研究センター（CJL）の学生たちは、名簿の名前とは別に、呼んでほしい名前を自ら選択している。本インタビューは、呼んでほしい名前とアイデンティティの関係がどのようなものであるのかを明らかにすることを目的として、日本を含む2つ以上の国にルーツを持つ7名の学生を対象に行なった。それぞれに、現在に至るまでアイデンティティに関して少なからぬ葛藤があったこと、また現在もアイデンティティの構築中であることを聞き取ることができた。現在、どの学生も、日本とそれ以外の国にルーツを持つこと、日本語とそれ以外の言語ができることを肯定的に捉えている。そこには、さまざまなアイデンティティが受け入れられる環境の存在が見えてきた。彼らにとって名前は、エスニック・アイデンティティを示すものとしてよりも個のアイデンティティを表わすものとして認識されていることがわかった。

キーワード：名前、アイデンティティ、学校、ことば、環境

### 1. はじめに

筆者は2015年9月から翌年2月まで早稲田大学日本語教育研究センター（CJL）において漢字の3レベルのクラスを担当した。漢字クラスの特徴は、日本語を話す能力のレベルに大きなばらつきが見られるという点である。このことと関係があると考えられるもうひとつの特徴として、名簿に日本名を持つ学生が非常に多いということがあった。

授業では、はじめに、各自呼んでほしい名前を紙に書いて机の上に出しておくことが慣例となっている。教師は1学期間、これに従って学生を呼ぶこととなる。筆者は、各自が選ぶ呼び名に注目した。名簿に日本名と日本以外の国の名前がある学生がどちらを選ぶのか、そのことは自己に対する認識、つまりアイデンティティとどのように関係しているのか、明らかにしたいと考えた。

### 2. 名前とアイデンティティについての研究

竹尾・矢吹（2006）は、日本に在住する外国出身者にインタビューを行ない、名前の使い方（名のり）とエスニック・アイデンティティの関係について分析している。個人の心理的傾斜や個人史を内包するような要因と、対人的状況や社会的状況を反映するような要因のせめぎ合いの中で名のりの形態が選択されているという。具体的には、出身文化の名前への愛着や思い入れがありながら、日本社会での受容度を考慮し、日本名に改姓する人が少なくない、といったことである。

朴 (2008a, b) は、日本名、韓国名の日本語読み、韓国名の韓国語読み (カタカナ表記)、それぞれのアルファベット表記の間を渡り歩きながらアイデンティティの揺れを経験していく自身の人生を語っている。「自分のアイデンティティが国籍や文化的所属や名前といったもののアンビバレントな不一致性の中にこそ存在している」(p.12), 「個としての自分」(p.21) といった思想に至っている。

本インタビューにおいて、インタビュアー (筆者) は「アイデンティティ」ということばを使って質問をすることはなかった。しかし、インタビューイ (学生) のほうが「アイデンティティ」ということばを出してきた。幼い頃から「自分は何者か」と悩み、やがてそれが「アイデンティティ」を追求する行為であると自らを俯瞰するようになった過程が、語りを通して垣間見えた。名前についても、上記の文献に見られるような葛藤が少なからずあったことが窺えた。

### 3. インタビュー概要

筆者が担当した漢字3クラスの中で日本名を持つ学生6名と、同時期に筆者が担当した総合日本語6クラスの学生1名に調査協力依頼をし、インタビューを行なった。総合日本語6の学生1名は、日本にルーツを持ち、日本語が非常に流暢だが漢字が苦手で、他の6名と共通の特徴が見出せたため、調査協力者に加えた。

学生A, B, C, Dは日本名と日本以外の国の名前を持っている。E, Fは日本名のみである。Gは日本以外の国の名前のみである。いずれの学生も日本と日本以外の国の両方にルーツを持つ。名簿では日本名をみの学生も日本以外の国の名前をみの学生も、クラスで呼ばれる名前は他の名前 (ニックネーム) を選ぶことができる。それを前提として、名前とアイデンティティという観点から話を聞いた。

2016年1月末、最後の授業の後、22号館の「面談室」において1名ずつインタビューを行なった。インタビューは全て録音した。

録音したデータを、インタビュアー (筆者) の発話も含めて文字化した。インタビュアー (筆者) をIと表記する。

調査協力者の概要は表のとおりである。

表1 調査協力者

	性別	父母のルーツ	所 属	名前の構成	クラスでの呼び方
A	女	父はオーストラリア人, 母は日本人	X プログラム	3, 2-4	4
B	女	父母ともに日系ブラジル人二世	X プログラム	1, 3-2	2
C	女	父母ともにフランス人 (Cは養子)	X プログラム	3, 2-4	2
D	女	父はフィリピン系アメリカ人, 母は日系アメリカ人	Y 学部の1年生	3, 4-2	4
E	男	父は日本人, 母はフィリピン人	Y 学部の1年生	1, 2	2
F	男	父母ともに日本人	Y 学部の3年生	1, 2	2
G	男	父はカナダ人, 母は日本人	Z 学部の1年生	3, 4-4	4

名前の構成 (大学の名簿に基づく)

1 = 日本姓, 2 = 日本名, 3 = 日本以外の国の姓, 4 = 日本以外の国の名前

## 4. インタビュー

### 4-1. 調査協力者 A へのインタビュー

父と母は日本で出会った。A はオーストラリアで生まれ、2 歳から 6 歳まで日本で過ごした。日本の幼稚園に通った。幼稚園の記憶ははっきりあり、当時の友だちも覚えている。その後はオーストラリアで育ったが、何年かに 1 回は家族で日本の祖父母のもとへ遊びに行っていた。中学生のときと高校生とき、それぞれ 1、2 回、休みを利用して日本へ 2 週間の留学をした。また、高校卒業後、友だちと日本へ旅行をした。現在、オーストラリアの大学の 3 年生で、早稲田に 1 年間の留学中だが、それは高校のときから考えていた。早稲田への留学は母方の祖父の勧めでもあった。

### ■日本人とオーストラリア人

I：じゃ、まあ、日本語については、ずっと日本語で話してたってことね。家ではどうなの？

A：家では、母とは日本語で話してますけど、父とは英語で、で、小学校の頃は日本語に全然興味がなかったんですけど、でも、中学校の頃、2ヶ月ぐらい日本に来て、その頃ちょっとやっぱり日本語勉強しないといけないなって考え直して、家でもっと日本語話すようになりました。

(中略)

I：自分の意識としては「日本人」っていう感じだった？

A：小学校の頃は、日本人の血があるって知ってましたけど、「日本人」って気持ちではなくて、小学校の頃はあんまりアイデンティティのこと考えてなかったから、全然もう、普通に。

I：周りも普通に？

A：周りは、あたしは小さい学校に行ったので、別に、人種差別とかそういうのはなかったんですけど、でも、あたしともう一人の女の子しかアジア人の子いなくて、で、まあ、あの、なんか、1回か2回はちょっと人種差別っぽい経験がありましたけど、でもあんまりわかってなかったと思います、みんなも。で、オーストラリアの高校に入ってから、だんだんアイデンティティのことを考えはじめて、なんかそういう複雑な時期が(笑)。

I：複雑な時期があったの？そっか。そのときには、結局、じゃ、答えみたいなものは……

A：今は、あたしは両方日本人とオーストラリア人、です。

I：うん。両方持っている、と思っている。

A：両方持っていて、両方持っていないなくても、その血があって、家族がいるので。

幼い頃は日本のルーツをあまり意識していなかった。そのため、日本語にも興味がなかった。しかし、中学の頃、母と日本に2ヶ月ほど滞在し、日本のルーツを強く意識する

ようになったようである。その後、高校生になると「だんだんアイデンティティのことを考えはじめて、なんかそういう複雑な時期が」あった。現在はそんな時期も乗り越え、「今は、あたしは両方日本人とオーストラリア人、です。」ときっぱり述べた。その根拠として「血」と「家族」を挙げている。

### ■名前へのこだわり

- I: クラスで「オーストラリア名」って言ってるじゃない? 「日本名」という名前もあるでしょ? でもそれは全然使っていないのね?
- A: そうなんです。それがちょっとおもしろくて、あたし家族からも、とにかくみんなから「オーストラリア名の短縮形」って呼ばれてるんです。あたしの日本人の家族もみんな「オーストラリア名の短縮形」って言って、「日本名」っていう名前はもう持っていないみたいなので、呼ばれたら絶対反応しないんですけど。幼稚園の頃は「日本名」でしたね。
- I: あ、そうなんだ。
- A: 「日本名」ちゃんって言われてました。で、オーストラリアに来て、母と父がやっぱり日本語の名前は呼びづらいから、英語の名前持ってるからそれで呼んでもらえばいいじゃないって言われて。

名前についてのエピソードは、名前がアイデンティティと密接な関係にあることを物語っている。日本の幼稚園に通っていたときは「[日本名]ちゃん」と呼ばれていたが、オーストラリアへ行ってからは「オーストラリア名の短縮形」とみんなに呼ばれている。「日本名」については、現在は「呼ばれたら絶対反応しない」というほど自分とは結び付かなくなっている。

- I: 自分の意識としては「オーストラリア名」とか「オーストラリア名短縮形」と思っている。
- A: 「オーストラリア名」は嫌いな人に呼ばれてます。嫌いな先生とかに「オーストラリア名短縮形」とか呼んでいいですかって言われたら、いいえって。
- I: (笑) なんで? ちょっと距離を置いた感じ?
- A: はいはい。
- I: でも、普通は「オーストラリア名短縮形」って。

「オーストラリア名の短縮形」への愛着は、「嫌いな人」には呼ばせない、という態度まで生じさせている。

## ■ 2つのルーツを持つこと

I：じゃ、今はオーストラリア人と日本人と両方持つてゐることは自分のなんか、いいこと、2つあるからいいこと、って感じ？

A：はい。すごくラッキーだと思ってます。

I：うん。ラッキーよね。

A：特にオーストラリアではあまり2言語を持つてゐるのがないので。

2つの国にルーツを持つことについて、現在は非常に肯定的に捉えている。英語と日本語が流暢であることが社会で肯定的に評価されると認識していることが、その肯定感を後押ししていることも窺える。

## ■ 英語圏の中のオーストラリア

さまざまな英語話者が集まる早稲田大学で、オーストラリアの英語を話すことについての意識はどのようなものであるのか、聞いた。

I：今日本でみんなしゃべってる英語は基本的にアメリカの……

A：USの英語ですよ。

I：そう、USの英語。そしたら、英語話したときになんかアクセントが変、とか言われることある？

A：あたしは、すぐ「何人？」とか聞かれます。でもオーストラリアで英語話してても、けっこうバイトの最中とかで何回かお客さんから「イギリスのアクセントですか、アメリカのアクセントですか、カナダのアクセントですか、アイリッシュの……」いろんな、聞かれてて、だから、あたしあまりオーストラリア人のアクセントがないかな、と思ってて、で、日本でもあんまり何も言われないので。

I：あ、ほんと。じゃ、なんかそれは自分で意識したんですか？

A：意識しないんですけど、あたしは英語話すとすごく強いオーストラリアのアクセントだと思って嫌だな、と思うんですけど。

I：あ、自分ではそう思ってるの。

A：自分ではそう思ってるんですけど、でもみんなは意外とあんまり強くないとか、え、オーストラリア人なの、とかって。

(中略)

I：英語圏として、他のいろんな英語との比較で自分はオーストラリア人だっというアイデンティティももっとはっきりするかな？他のいろんな英語があるところに行くと。

A：まあ、あの、そういう、オーストラリアはユニークだっというようにずっと小さい頃から教えられてるので。

I：教えられてたの？そういうもんなんだ、オーストラリアって。

A：オーストラリアはけっこう「あたしたち」みたいな。

「あたしは英語話すすごく強いオーストラリアのアクセントだと思って嫌だな、と思うんですけど」と英語話者間での評価を気にする一方、自分の英語は出自に縛られない独自のものであるという意識があることも窺える。

## ■日本への帰属感

I：これから、将来、どこに住みたいですか？

A：将来は、あたし、海外に住みたいんですけど、でも日本とオーストラリアは海外ってあたし思わないので、うーん、高校の頃は日本にずっと住みたかったんですけど、でも実際日本に住んでみて、なんか、なんとなくいつか日本に来ちゃうって気持ちがあって、あんまりオーストラリアにいるっていう気持ちはないんですね。

I：あ、そうなの！いつか日本に帰っちゃうって感じがするの？一番最後には日本に帰ってくるって感じ？

A：最後っていうか、絶対人生の長い間は日本に住んでるってもうわかってます。いつかそうなるって、なんか。そういう気持ちがあるんですよ。なんか、わかんないですけど。

将来は「海外」に住みたいと思っている。「海外」とは日本とオーストラリア以外のことである。しかし人生のうちの長い時間、日本に住むことになるだろうと予感しているという。「海外」に住むことが冒険や挑戦であるのに対し、日本には絶対的な帰属感、帰ろうと思っただけでも帰れるという安心感があるということだろう。

## 4-2. 調査協力者 B へのインタビュー

祖父の代が日本からブラジルへ渡った。ブラジルで生まれ、学校もずっとブラジルで通った。2009年に初めて家族旅行で日本へ来た。祖父は日系ブラジル人だが現在長野県に住んでいる。Bは祖父も日本に住んでいるし、もっと日本を知りたいと思い、Xプログラムで早稲田に来た。

普段ブラジルでは「ブラジル名」を使っているが、日本では「日本名」を使っている。「覚えやすいから」と語った。

自分はブラジル人だと思っているが、日本人だと思うこともある、という。

## ■日本人であること

I：どんなときに自分は日本人だと思うんですか？

B：ブラジルにいるとき（笑）。

I：ブラジルと日本以外に旅行に行くときもあるでしょ？そのときはみんな日本人だと思いますか？

B：そうです（笑）。あ、日本人ですか、って思われて。

I：日本人と思われることはどうですか？嫌じゃない……？

B：いいです。嫌じゃない。

将来は、ブラジルで、ブラジルと日本の関係をよくするような仕事をしたい、という。

ブラジルで、日系人が周りにたくさんいるが、あまり日本に興味がない人も多いということである。その中でBは祖父が日本におり、ブラジルの家でも母が和食を作ることが多いことから、日本との繋がりを意識してきた。将来結婚して子どもが生まれたら自分も日本のことをちゃんと伝えたいと語った。

#### 4-3. 調査協力者Cへのインタビュー

両親ともにフランス人だが、仕事の関係で日本に4年間住んでいた。当時両親には男子（兄）がいたが、もう一人子どもが欲しくて養子縁組をした。それがCである。Cは生まれてから1年間だけ日本にいて、その後、父の仕事の関係で家族とともに香港2年間、フランス3年間、バンコク4年間、フランス5年間、シンガポール2年間（高校生）、と暮らし、大学のためにフランスへ帰った。

#### ■フランスではアジア人のアイデンティティ、アジアではフランス人のアイデンティティ

I：いろいろな国に住んでいましたけど、自分のことはずっとフランス人だと思っていましたか？

C：えっと、おもしろいことがあって、アジアに住んでいたら、フランス人のアイデンティティを持っていますけど、でもフランスではアジア人のアイデンティティを持っています。はい、本当に（笑）。（中略）日本では、ヨーロッパ人みたいじゃないから、ヨーロッパ人みたいな友だちとは違う感じを持っています。たとえば、友だちは金髪とか、みんなはすぐわかりますけど、わたしは違います。

フランスでは、自他ともに、多くのアジア系フランス人のうちの一人だと認識しているが、日本では外見や名前から「日本人」だと思われ込まれることが多い。日本で、「外見がヨーロッパ人らしいヨーロッパ人たち」と食事に行き、店の人がずっとCだけに向かって話すというような経験をする、と笑った。

I：名前は、[フランス名]という名前もあるでしょ？ずっとフランスでは[フランス名]？

C：いえ、実はフランスでは、いろいろな名前があります。パスポートのために、IDカードのために。でも、みんなは最初の名前だけ呼んでいる。だから、わたしの名前は[日本名]だけです。（中略）実はこの名前は兄が選びました。あのとき兄は4歳でした。兄のクラスの中に日本人の女の子がいました。彼女の名前は[日本名]でした（笑）。妹ができるとき、両親にこの名前を選びたいと言って、そして両親はOK（笑）。両親は漢字を選びましたが、パスポートは漢字がありま

せん。ちょっと悲しいんですが。

(中略)

I: じゃ、名前だけでちょっとアジア人っぽって思うんじゃない?

C: でも苗字が[フランス姓]だから、とてもフランスっぽいです(笑)。だからいつもみんなは「あ、ハーフですか?」とか。

書類上の名前は[フランス名1][日本名][フランス名2]……[フランス姓]と長いものだが、普段は[日本名]のみを使っているという。その[日本名]が兄が選んだ名前だというエピソードには、Cを家族みんなで迎え入れようとする両親の配慮が伺える。日本好きの両親がきれいな漢字も選んでくれている。Cは[日本名]の漢字も気に入っており、パスポートに漢字の記載がないことを「ちょっと悲しいんですが」と語っている。一方、[フランス姓]は非常にフランスらしい響きがするため、[日本名][フランス姓]と名乗るだけで、アジア人とフランス人の両方のアイデンティティを表わすことになるようだ。

### ■日本でキャリアを積みたい

シンガポールの高級ホテルで2ヶ月間アルバイトをしたことがあり、その後、修士(経営とマーケティング)のプログラムで研修が必要であったため、フランスの同高級ホテルで6ヶ月間働いた。

C: 本当におもしろかったです。同じ会社ですが、文化は全然違います。アジアの文化とフランスの文化。シンガポールの文化と日本の文化、アジア人としてみんなは敬語を使います。英語で敬語はないんですが、お客様は本当に大切。フランスでは、まあ(笑)、サービスはちょっと違うんです。たとえば日本人の観光客がパリに来たら、ちょっとびっくりします。お店に入ったら、従業員は挨拶はしません。バックオフィスも空気がちょっと違います。

アジアの客がたくさん来るがフランス人はアジアの客がどのようなサービスを期待するのか知らない、と感じたという。Cは「どうしてわからないの?」「わたしはわかるのに」と思ったという。

日本で同高級ホテルの面接を受けたが、日本語のレベルが足りなかった。メールはずっと英語でやり取りしていたため、面接が日本語で驚いたという。今後敬語を中心に日本語を学んで、再度日本のサービス業に挑戦したいと考えている。

### ■行き着く場所は

アジアとヨーロッパに精通した人材として活躍できる場を探していきたいと考えているが、最終的にどこに落ち着きたいか聞くと、それは未知のことだと言った。



C：フランス人と結婚したらたぶんフランスに帰りますけど、でもまだわかりません。日本人だったら（笑）。

将来的にどこに落ち着くかはまだいろいろな可能性があると考えている。フランス人の両親との出会いによってフランス人のアイデンティティが築かれ、今後の出会いによってまた新たなアイデンティティが築かれていくのかもしれない。

#### 4-4. 調査協力者 D へのインタビュー

母はアメリカで生まれ育った日系二世、父は幼いとき渡米したフィリピン人である。苗字はフィリピンの苗字である。両親はアメリカで結婚し、同じ会社で二人同時に日本へ転勤となった。10年ほど日本で暮らしている間に D が生まれた。D が3歳のとき、アメリカへ戻った。家の中にフィリピンや日本の文化はなかったという。父はタガログ語が話せず、母も日本語が話せない。[日本名] というミドルネームがあるが、普段は全然使っていない。自分は日本で生まれたが、小さいときでちゃんと経験できなかったから、もっと日本が知りたいと思ったという。

#### ■もっと日本人になりたい

D：家族で日本に旅行したとき、あたしはすごく日本のことが好きになりました。（中略）日本はみんなすごく優しいと思いました。で、マナーとかよくて、すごくきれいな国だと思いました。

I：これから4年ぐらい日本にいますでしょ？これからどんなことをしたい？

D：日本の文化とか理解したい。で、本当の日本人のライフスタイルを経験したい。

I：そうね。でも寮に住んでるからね。もしホームステイとかしたらわかるかもしれないけど。

D：あたし、高校3年生のとき2週間ぐらいホームステイしました。日本に。でもすごく時間がなかったので。あたし、日本人のハーフだからね、日本人になりたい、という意識があります。そういう希望があって、ここに4年間住んでいるから、もっと日本人になりたい。

I：そういう感じがあるんだ。

D：はい。今は国際寮に住んでいるので、留学生とか多いから、引っ越ししてからもっと日本人の経験ができるようになりたい。

「あたし、日本人のハーフだからね」という D は、日本人の血が入っていることに特別な価値を見出している。日本人になる権利、あるいは日本人になる使命を感じているようである。「本当の日本人のライフスタイルを経験したい」、そして「もっと日本人になりたい」という。3歳までしかいなかったとはいえ、生まれたのが日本であるため、故郷のように感じてきたのかもしれない。

## ■日本人だと思われたい

- I: 日本で生活してるときに、見たときにはみんな日本人だと思うでしょ？
- D: え、そう思わないと思います。
- I: 思わない？外国人だと思う？
- D: はい。
- I: ほんと？そんな感じ？なんか、英語で話しかけたりしますか？
- D: はい、英語で話したり、なんか、ん～。
- I: じゃ、そのときは、友だちと英語で話してるからじゃない？もし一人でたとえば買い物に行ったら、日本人だと思うんじゃないかな。
- D: ほんとですか？え～、あたしそう思わない。
- I: 顔はでも日本人と変わらない、同じだと思います。こんな日本人もいると思う。
- D: ああ、でも肌の色がすごく黒いじゃない？（笑）
- I: そうかな？いやいや、日本人もいろんな人がいるからね。もっと黒い人もいますよ。だから日本人みたいだと思うけどね。
- D: ああ。あ、嬉しい～。
- I: 嬉しいんだ。へえ。どうして日本人になりたいの？
- D: なんか、ん～、ん～、なんだろうね。
- I: アメリカ人でもいいんじゃない？
- D: アメリカ人もいいんだけど、日本人はすごくイメージがきれいで、いつもかわいい服とか着てるとか。アメリカは、自由になれるんですけど、日本人は文化とかすごく、おもしろいと思います。アメリカと全然違うので。両方好きです。

アメリカにいるときから日本人になりたいという気持ちが強かったという。アメリカでも周りの人に日本人だと思われると嬉しかった。学校ではフィリピン人や中国人と思われることが多かった。

## ■フィリピンのルーツ

- I: フィリピンのことには興味がないんですか？
- D: フィリピンのことにはあまり興味がないんです（笑）。全部日本のことについて興味があった。あまりフィリピンのことについて興味がなかった。

日本に憧れる一方、フィリピンには興味がなかったという。フィリピンへは行ったこともない。もちろん、今後、フィリピンのルーツを辿りたくなるときが来るかもしれないが、今のところ、フィリピンへの帰属感はない。

- D: お父さんがすごくアメリカ人だけど、フィリピン料理ができるので、それだけ、フィリピンの文化。

油を多く使った肉料理や鍋料理など、フィリピン料理を父が作ってくれるという。

## ■名前に残る家族の歴史

Dの名前は〔アメリカ名〕〔日本名〕〔フィリピン姓〕という構成になっているが、〔日本名〕は単なるミドルネームとして普段は使用していない。〔フィリピン姓〕は非常に珍しく、アルファベット表記が読みにくい。

D: フィリピンでもあんまり聞かない。

I: ああ、珍しい名前なんだ。

D: はい。で、昔から変わったかもしれない。

I: あ、途中で変わっちゃったかもしれないんだね。スプリングを間違えたとかね。

D: はい (笑)。そういうことです。

〔フィリピン姓〕は微かにフィリピンのルーツを残しているが、フィリピンでも見られない姓であることから、どこかの時点で変形してしまったものと思われるという。結果、家族の歴史が生んだ、固有の姓となっている。やや古めかしいが平凡な〔日本名〕に、漢字はない。長く日本に住んでいた両親は、日本がとても好きだという。ミドルネームに日本のルーツを残したいと考えたようだ。Dは「もっと日本人になりたい」と思っているのだが、それが〔日本名〕を名乗ることには繋がっていない。〔アメリカ名〕のアイデンティティそのものを「もっと日本人に」変えたいと思っている。

## 4-5. 調査協力者Eへのインタビュー

日本人である父が仕事のためフィリピンへ行き、母と結婚した。出身はマニラだがEの教育のためセブ島へ移った。父が〔日本名〕と付けた。父の名前の前の一文字を取った名前である。Eはフィリピンで生まれフィリピンで学校に通った。インターナショナルスクールに通い、タガログ語は理解はできるが話せない。母は日本で5年ぐらい仕事をしたことがあり、日本語がEより上手だという。母とは英語、日本語、タガログ語で話すが、父は日本語しかできない。父はいつも世界中を回っていてあまり家にいなかった。祖父母が日本にいるため、5歳ぐらいから毎年日本に来ている。

## ■自分はフィリピン人

I: 自分では自分をフィリピン人だと思う？

E: はい。ずっとフィリピンで育って、勉強して、家はフィリピンですから。

(中略)

I: 名前は日本人で、日本人と思われて、という経験はありますか？

E: まあ、ちっちゃい頃でしたけど、フィリピンでジムに行ってお母さんは僕の名前を書いて、〔日本姓名〕って書いて、みんな、あ、日本人？って思って、僕が入っ

たら日本人に全然見えなくて (笑), はい。

こういう経験はたくさんしているから慣れているという。

しかし, 自分では自分をはっきり「フィリピン人」だと思っている。「ずっとフィリピンで育って, 勉強して, 家はフィリピンですから。」とその根拠も述べている。

### ■自分の中の日本人

I: 自分で自分が日本人っぽいと思うことはある?

E: ありますね。まあ, やりたいことはすぐやること, じゃないかなと思います。フィリピンでの考えは, 「後で」とかいつもありますから。で, みんな僕がしっかりしてるな, と思って。はい。

フィリピン人はやらなければいけないことを放っておく傾向があると分析しており, それに対し, 自分の「やりたいことはすぐやる」性格は日本人っぽいと考えている。

### ■移動しない

留学生が大勢いる Y 学部の環境もいいが, フィリピンの学校のほうがもっと居心地がよかったという。

E: まあ, 僕, フィリピンの学校で幼稚園からずっといましたから。

I: 慣れてるってことね。

E: ずっと慣れてて, 初めて違う学校に移ったから。

インターナショナルスクールに幼稚園から通い, 古株として伸び伸びとやっていたようである。早稲田は入学後まだ半年しか経っていない。

I: 日本の人たちはあまりフィリピンのこと知らないんじゃない?

E: まあ, 今の友だちは最初に会ったときに知ってました。みんな日本人でアメリカで育ったから, その人たちの一番仲がいい友だちはアメリカではフィリピン人だったから, 僕に会ったとき, あ, フィリピン人じゃん, って。

現在も「フィリピン人」として彼を受け入れてくれるアメリカ育ちの日本人と仲良くしている。幼稚園からずっと通っていたフィリピンのインターナショナルスクールと似た環境に身を置いているといえる。

## ■今後のこと

I：これからどこで働きたいですか？  
E：フィリピンで自分のビジネスを始めたいですが、アメリカにも行きたいですね。  
I：アメリカには行ったことはあるんですか？  
E：いや、まだないです。  
I：行ったことはないけど。その、インターナショナルスクールにはアメリカ人がたくさんいましたか？  
E：いや、あんまりいません。  
I：そうなんだ。なんでアメリカに行きたいの？  
E：あの、まあ、友だちほとんどみんな今アメリカに行って。はい。  
I：あ、そうなんだ。フィリピンのときの友だちがみんなアメリカにいる。  
E：はい。で、大学院もアメリカで行くかもしれません。

ビジネスを学んでセブ島でレストランを持ちたいという。家族もみんな料理が好きだから一緒にやるつもりだという。

DとEは仲がよく、漢字のクラスではいつも一緒に座っていた。フィリピンと日本という組み合わせが共通で、学部も学年も同じである。しかしDがアイデンティティや進むべき方向を模索中であるのに対し、Eは「フィリピン人」というアイデンティティも、アメリカでビジネスを学んで、セブ島に帰って家族でレストランを持ちたい、という今後の目標も、明確になっている。

## ■名前は友だちが改造してくれる

I：自分の名前は好きですか？  
E：はい。  
I：[日本名の前半]ちゃんってみんな呼ぶんですか？  
E：はい、ちっちゃい頃から。日本人の友だちが付けました。

小中学校の間は週に1回補習校に通っていたため、フィリピンでも日本人の友だちがたくさんいたという。そこでは古典的な日本のあだ名で呼ばれていた。

Y学部では、E（ここでは説明のため仮名をマサキとする）の仲のいいグループの中に、同じニックネームMasを持つマスミ（仮名）がいたため、それぞれをSakiとSumiと呼ぶようになった。それで、Eの今のニックネームはSakiである。

E：友人がマスミ（仮名）ってあって、英語でMas。僕も昔Masだった。だから、SakiとSumiになりました。  
I：(笑)おもしろい。

この発想は名前を漢字で捉えているかぎり浮かばない、英語の語感によるものである。Eにとって「日本名」とは、雑多な起源を持つアルファベット表記の名前の一つにすぎないようだ。

#### 4-6. 調査協力者Fへのインタビュー

両親ともに日本人だが、Fが5歳のときアメリカへ移った。父の仕事の関係で14歳から2年間ドイツ、2年半シンガポールで暮らし、その後早稲田へ来た。ドイツではインターナショナルスクール、シンガポールではアメリカンスクールに通った。現在Y学部の3年生である。

#### ■母語は英語

- I: 母語といたら日本語なの?  
 F: 英語ですね。  
 I: でも日本語も普通に話せてると思うけどね。  
 F: ん～、まあ、話せるは話せるんですけど。少しずるいんですけど、僕はすごくごまかせるんですよ。ごまかすのが上手なんです、正直に言うと。これは漢字の授業を受けてる理由の一つなんですけど、もし紙に漢字を書けって言われたらちょっと難しいんですよ。  
 I: 確かにね。漢字はすごく簡単なこともわからないみたいだけど、それは、学校で日本の教育を受けてないから難しいことがわからないのは当たり前よね。だけど家の中ではいつも日本語で話してたの?  
 F: そうっすね。基本的に日本語。  
 I: そうか。だからだね。会話はすごく自然よね。  
 (中略)  
 I: ご両親は英語は上手?  
 F: 特に(笑)。父はたぶん上級レベル、母は中級までもいきませんね、たぶん。

よく家事の代わりに家の手伝いとして「このドキュメント訳して」と仕事を頼まれていたという。

#### ■アイデンティティを模索して

- I: アメリカで「日本人」って思われるでしょ?  
 F: ん～～ まあ、「外国人」さらに「アジア人」だと思われるのが多いですね。でも彼らはアジア人のさまざまな国の人々の違い、わからないので。まだ人生で一回も「日本人ですよ?」って言われたことがないです。  
 (中略)  
 I: 自分の感覚としては、日本人? アメリカ人?

F：小さいときはアメリカ人だと思ってたんですけど、中学から海外に行き、おそらく、個人的には中学と高校が一番成長した時期だったので、小さいときは普段「僕はアメリカ人だ」と言い張ってましたけど、高校生になってから僕はなんなんだろうってアイデンティティを考えるようになって、僕の考え方は、小さいときはアメリカ人に近い考え方だったんですけど、今はアメリカ人でもなく日本人でもなくドイツ人でもなくシンガポール人でもなく、なんかその、全部混ざった考え方をしているの。

I：なるほど。自分は自分、っていう。

F：そうですね。最近では自分は自分だという考えになっていますね。

幼い頃は自分はアメリカ人だと言い張っていたが、高校生になってからはそれにも疑問を持ちはじめ、現在はいろいろ入り混じった自分をそのまま受け入れているようである。ドイツでは日本人が非常に多いデュッセルドルフで暮らし、はじめは日本人のグループに身を置いていたが、やがて考え方の相違を感じるようになっていった。

I：中学に入ったとき最初の何ヶ月かは、僕はドイツ語話せない問題もありましたし、さまざまなランゲージベースのハードルがあったので、自然に僕は日本人の学生と会話をして、最初の何ヶ月かはそう過ごしたんですが、やはりドイツ語を少しずつ話せるようになってからは、日本人のグループから離れましたね。これは別に個人的に選んだ選択肢ではなく、自然に。ですから、おそらく、それは僕の性格が日本人らしくないということだと思います。

その後はドイツ人のグループのほうが馴染みやすく、ドイツ人と英語とドイツ語を混ぜて話していたという。シンガポールでは、基本的にみんなが英語を話すため、ドイツであったようなハードルはなかった。また、アメリカンスクールはアメリカのグリーンカードを持っている人が優先的に入れるため、日本人でもFのような背景を持つ人が多く、おもしろかったという。

## ■今後のこと

I：将来はどんなことをしたいんですか？

F：そうですね、あんまり決まっておらず、最近もうこの何ヶ月か、もうずっと悩んでたんですけど、父と話し、他の人生経験豊富な方と相談し、あの、弁護士になるのはどうかって勧められたんですよ。それはただその一人の方からだけではなく、何人かからあなたの性格は、考え方はものすごく弁護士に合ってるって言われて。わたしのグリーンカードの再発行を手伝っていただいた弁護士の方からも……

I：へえ、すごいじゃない。

現在3年生であるFは、就職について悩んでいたが、最近グリーンカードの再発行で

お世話になった弁護士にFの性格は弁護士に向いていると言われ、弁護士になることを考えはじめたという。いずれにしてもグリーンカードを無効にしないためにしばらくアメリカに住まなければいけない。アメリカで弁護士を目指してみようと思っている。

#### ■名前は名前でそこから逃げる意味はない

I：自分の名前は好きですか？

F：小さいときは、あまり好きではなかったですね。わざと名前を〔日本名前半〕に短くして自己紹介していましたね。でも今はどうでもよくなったというか、名前は名前でそこから逃げる意味はないから。

I：なんで〔日本名〕が嫌だったの？

F：やっぱり女子っぽいから（笑）。

確かに〔日本名〕には女の子の名前のような響きがあるが、それは日本語の感覚があつてこそわかることで、他の国の人々にとっては必ずしもそうではないだろう。しかし「名前は名前でそこから逃げる意味はないから」という思いに至るまで葛藤があつたことが窺える。

#### 4-7. 調査協力者Gへのインタビュー

カナダ人である父が日本の大学へ留学中に母と出会った。Gはカナダで生まれ、1歳に満たないうちに日本へ戻った。15歳のときに父の仕事の都合でスイスへ、その2年後カナダへ、そして19歳の今、再び日本へ戻ってきた。Z学部の1年生で、母方の祖母の家に住んでいる。

#### ■自分は日本人、弟は外人

I：小さい頃は普通に「日本人」という気持ちでした？

G：そうですね。気持ちとしては日本人なんですけど、そこでおもしろい違いが出て、弟がいるんですけど、弟は10歳のときスイスに行って、カナダに行って、今もカナダなんですけど、その分岐点というか、年齢層の違いというか、僕は15歳で、ある程度、たぶん時期としても思春期入ってそれぐらいだったので、ある程度自分の中で形ができてたんでしょうね。でもまだ弟は構成の途中だったんで、海外住むことで、海外のほうのアイデンティティというか、思想が強くなってますね。でも僕の思想は日本人に近いんですけど、弟のほうはカナダ人とか外人のほうに近いものですね。

Gは欧米や欧米人を「海外」「外人」と呼び、自分を「日本人」だと思っている。5歳下の弟とは仲がいいというが、帰属感に大きな違いを感じている。

Gは小学3年生まで日本の公立小学校、4年生からインターナショナルスクールに通っ



た。弟は小学1年生からインターナショナルスクールに通った。インターナショナルスクールといっても子どもはほとんどが日本人で、授業以外は日本語で話していたという。

スイスでもカナダでも、心から打ち解けられる友だちは日本人だったという。カナダのプライベートスクールには30カ国もの子どもがいたが、いつも一緒にいるグループという国ごとに分かれていて、Gも週末に遊ぶのは日本人のグループだった。

I：でも弟さんは違ってたってことね？

G：弟はスイスのときは一緒にインターナショナルスクールに行ってたんですけど、カナダに行ってから公立に行きはじめたんで。あんまし公立は関係ないっすね。

I：弟は違う学校に行ってたっていうのは、それは自分の考えなの？お父さんお母さんが考えて、彼にはこっちのほうがいいだろうって思ってってこと？

G：そうですね。基本的に僕はずっと私立だったんで、今さら公立行かして大丈夫かって感じで心配されてて（笑）。情けないんですけど。まあ、弟のほうはけっこうマインドが外人で自分の言いたいことは言えるし強く主張できる子だったんで、公立行っても大丈夫だろうってことで公立に行ったんですけど。

カナダへ行ってからは、両親が子どもたちの性格等を考慮し、Gには私立、弟には公立、と学校を選んだという。弟が「自分の言いたいことは言えるし強く主張できる子」だったのに対し、公立学校ではやっていけないだろうと見做された自分を「情けないんですけど」と言っている。

I：早稲田に行く、日本にまた大学は行くって決めたのは自分で決めたの？

G：いえ、あの、そもそもカナダの大学に行こうと思ってたんすよ。それでカウンセラーの方が早稲田の帰国子女枠があるけどどうする、みたいなことを言われて、じゃ、それ受けてみます、って。

(中略)

I：日本に「帰る」ってさっきから言ってたもんね。カナダは「行く」って感じ？どっちも「帰る」？

G：カナダは基本的に行ってましたけど、夏休みとか祖父とか祖母を訪ねるときに行ってた感じの記憶しかないんで、それから2年間ぐらしか住んでないんで、自分の家っていうと日本のほうですね。

日本では、小さい頃から祖母の家も従兄の家も近く、よく一緒に遊んでいた。従兄の家は現在住んでいる祖母の家の隣にある。従兄は今20歳で、よく話したり会ったりしている、という。

I：「あなたは何人ですか」って聞かれたら「日本人です」って感じなんだ。

G：はい、実際考え方が日本人なんで。それこそアイデンティティがもうでき上がってるんで。たぶん弟にそういうの聞くと「カナダ人」って言うと思うんですけど。

(中略) やっぱ環境がでかいんだと思います。あれですね、あれとおんなしですよ。日系の方とかが考え方がほんとに海外の、友だち、今、早稲田で日系の子がいるんですけど、日系っていうか、ほとんど海外で育ったっていう子がいるんですけど、日本語もしゃべれるんですけど、でも英語が第一言語で、考え方も外人的なところがよく見られますね。

(中略)

I: じゃ、今後もずっと日本に住んでいきたいって思ってるのね?

G: そうですね。出張とかそういうのがない限り。

I: 日本で就職して、で別に英語は使わないでいいの? 英語を使う仕事とかじゃなくて。

G: 英語を使う仕事がいいですね。それが強みなんで (笑)。

I: あ、そうか、やっぱり。

日本語のほうが得意だとはいうものの、英語ができることが強みだとは自覚している。これから4年間Z学部で学んだら、英語のレベルもますます上がるであろう。バイリンガルの日本人として生きていきたいと思っているようだ。

#### ■カナダの名前を引き継いでいきたい

小学3年生まで通った日本の公立の小学校では、読みやすいように[日本姓][カナダ名]と母の苗字を使っていたという。

I: 日本語の名前はないんだ。よくミドルネームで日本の名前を付けたりするじゃない?

G: ミドルネームがうちの家系は伝統になってるものがあるって、長男には自分の父親の名前がミドルネームに付くんです。弟は次男なんで、父のミドルネームで祖父の名前がミドルネーム。

I: ああ、ずっとそうやって受け継いでいくってことになってんのね。

G: そういう形になってますけど、父は別に付けたくなかったら付けなくていいよ、て。

I: (笑) 自分の子どもに?

G: でも僕は付けたいと思います。

I: あ、ほんと。へえ。でも名前が[カナダ名]だから、みんなが「日本人じゃない」って思うでしょ?

G: そうですね。でもあんまし気にしてませんでしたね。日本語が第一言語だったんで。みんなと同じ思想だったんで。たぶん、外見が違ければ違うほどひどいと思うんで、僕は半分一応半分日本人なんで、けっこうアジアの血も強いほうだったんで。僕自体母親のほうに似てるんで。

I: みんななんて呼んでたの? [カナダ名短縮形] とか [カナダ名短縮形] くんとか?

G: [カナダ名短縮形] とかですね。

自分の子どもに自分の名前をミドルネームとして付けるという家の伝統を守っていきたいと考えている。自分は日本人であると考えながらも、脈々と引き継がれてきた父方の血統や文化を肯定的に捉えていることも窺える。

I：自分の名前は好きですか？

G：はい、好きです。

I：日本人じゃないみたいじゃない、名前は。でも別にそれはいいのね？

G：自分で言うのもなんなんっすけど、かっこよくていいかな、と。違うんで、やっぱり人と。[カナダ姓]（父方の祖父がフランス系カナダ人であるため、フランスの姓）なんてまずないじゃないっすか。

「日本人」だと思っているが、みんなと同じでありたいと思っているわけではない。「まずない、人と違う」[カナダ名][カナダ姓]を「かっこよくていい」と思っている。

## 5. まとめと考察

日本と日本以外の国で名前を使い分けているのはBのみであることがわかった。Bはブラジルで育ち、ブラジル人であるという意識がはっきりしている。現在、日本へ日本のことをもっと知るためにやってきて、日本のルーツを示すもうひとつの名前[日本名]を使用している。それは新たな自分を発見するための新たな名前であるといえよう。他の6名は、愛着のある1つの名前をどこへ行っても使用している。[日本名]を使用しているFは「アメリカ人でもなく日本人でもなくドイツ人でもなくシンガポール人でもなく」と語った。一方、[カナダ名]を使用しているGは、自分は「日本人」であると言いつけている。彼らにおいては、2つ、あるいはそれ以上のルーツが自分の中で混然一体となっているため、名前を使い分けるのは困難であろう。「どこへ行っても自分は自分」という意識と、どこへ行っても呼ばれる自分の名前とが結び付いているのだといえよう。

社会生活においては、名前や外見といった、見てすぐわかる要素から出自を判断されることが多い。A、C、F、Gに共通して、生い立ちについて語る際、「アジア人」と口にしてしている。外見から「アジア人」と見られることにより、アジアへの帰属意識が生じ、結果として日本へと辿り着いている様子が窺える。

アイデンティティを「自分が思うことと他者が思うことによって形成される意識」（川上 2010）、あるいは「自己と他者との関係という社会的関係の中に立ち現れる『自分らしさ』（相浦 2013）と考えると、E（仮名マサキ）の「友人がマスマ（仮名）ってあって、英語でMas。僕も昔Masだった。だから、SakiとSumiになりました。」というエピソードは、まさに社会的関係の中で自己と他者を区別する役割を果たすのが名前であり、その意味で名前がアイデンティティと深く結び付いていることを示すものである。他でもない自分が呼ばれているという感覚、それは社会の中での自己の固有性を意識させ、またその固有な自己が社会に受け入れられているという感覚を生む。

本インタビューの調査協力者たちは、幼い頃より、日本を含む2つあるいはそれ以上の

国との繋がりの中で自己のアイデンティティを築いてきた。自己の固有性を十分に意識しているが、概してそれは肯定的な意識となっている。そこには、両親が、子どもが自己を肯定的に捉えることができるような環境を選んでくれていることも、見て取れる。Fは「僕はずっと私立に行ってたんで、今さら公立に行って大丈夫かって心配されてたんで(笑)。情けないんですけど。弟のほうはけっこうマインドが外人で自分の言いたいことは言えるし強く主張できる子だったんで、公立行っても大丈夫だろうってことで公立に行ってたんですけど。」と語った。Aは「あたしの高校はすごくマルチカルチュラルで、いろんな国の人がいて、でも他のミックスの人とたまに話すると、やっぱりあたしと逆の生活、すごく大変だったとか、差別がすごく多かった、とか、そういう人たちもいるので、あたしは今考えるとすごく恵まれてて、すごくラッキーだったと思います。」と述べており、彼らが恵まれた環境にあったことは、彼ら自身も自覚していることがわかる。早稲田大学という進路についても、Gは「カウンセラーの方が早稲田の帰国子女枠があるけどどうする、みたいなことを言われて、じゃ、それ受けてみます、って」と学校で助言を受けたこと、Aは、母方の祖父の勧めで早稲田大学に行きたいと考えようになったことを語った。現在3年生であるFは、就職について悩んでいたが、最近グリーンカードの再発行でお世話になった弁護士にFの性格は弁護士に向いていると言われ、弁護士を目指すことにしたと話した。本インタビューを通して、さまざまな葛藤を抱きつつ人生を一步一步進んでいく学生たちの姿が垣間見られた。そこでは、家族や身近な大人たちの支えが大きな役割を果たしていることも確かである。

私たちの実践も、学生一人ひとりの人生において日本語を学ぶことがどのような意味を持つのかを常に考えながら、学生一人ひとりのより良い人生のための日本語教育であることを目指したい。

## 参考文献

- 相浦裕希 (2013) 「日本語を学ぶ子どもが語る『自分らしさ』—複数のことばに育まれるアイデンティティ」川上郁雄 (編) 『「移動する子ども」という記憶とカーことばとアイデンティティ』くろしお出版, 266-287
- 川上郁雄 (編) (2010) 『私も「移動する子ども」だった—異なる言語の間で育った子どもたちのライフストーリー』くろしお出版
- 竹尾和子・矢吹理恵 (2006) 「在日外国人の名のり行動における関連要因の検討—エスニック・アイデンティティ研究の一視点—」『発達研究』20号, 67-79
- 朴育美 (2008a) 「名前とアイデンティティ (上) (自らを表現すること)」『ヒューマンライツ』239号, 7-13
- 朴育美 (2008b) 「名前とアイデンティティ (下) (「いま・ここ・私」を問う視点)」『ヒューマンライツ』240号, 20-24

(うえだ じゅんこ, 早稲田大学日本語教育研究センター)